

街の中でふわりふわりと考えるその1

「カルピスウォーター」 戸枝 陽基

小さい頃、大工をしていた僕の実家に、取引先からお歳暮なんかでカルピスの詰め合わせが届くことがあった。

母は、お客さんが来たら出そうと思うのか、押し入れの奥深くにそのカルピスを隠すのだが、僕は、そういうのを発見するのが七人いる兄弟の内一番得意で、見つからないように瓶を開けては、ちよつとずつ飲んでいた。

今思えば子どもの浅知恵、このくらいは大丈夫、まだわからないと少しずつカルピスを飲んでいるつもりが、幾日かそれを続けていると、誰の目にもわかるほど瓶の中のカルピスは少なくなる。ほどなく母に見つかり、ひどく叱られたりしていた。

ある暑い日のこと、お父さんがお医者さんをしているS君の家に遊びに行った。「外は暑かったでしょ」と言つて、S君のお母さんが僕に出してくれたのは、カルピスだった。

のどがカラカラだった僕は、そのカルピスを急いで一口ぐんと飲み、驚いた。その口も含んだカルピスが、いつも僕の飲んでいるカルピスと比べて、あまりに濃く甘ったるかっただからだ。

「うげええーなんじゃ、このカルピスは？僕はいつもビビってちよつとしか原液を入れない薄いカルピスを飲んでるけど、本当

はこのくらいたくさん原液を入れるものなのか？ちよつと濃すぎやしないかね？」

毎日この濃く甘ったるいカルピスを飲んでいるであろうS君を「あんなの飲んでいて、虫菌になったりしないかね」と余計な心配をしながら、僕は家に帰った。

そして、夜、布団に入り、そのカルピスのどに絡みつくような濃い味を思い出しながら、心の中で「金持ちカルピス」と名付けた。

僕は、昔から友達によくわからないことに深くこだわる奴だと言われる。カルピスも、金持ちカルピスを飲んで以来ずっと、「正しいカルピスの濃さって、どのくらいなんだろう？」と気にしていた。

そんな僕の疑問に答えるかのように、数年前。カルピスウォーターなるものが発売された。それは、原液のカルピスが初めから水とともに缶に入っている。

カルピスの会社自体が売りだしたのでから、これを飲めば、カルピスの正しい濃さというのか、少なくとも、会社がどのような濃さで飲んで欲しいと思つているのかわかる。初めてそれを飲むとき、僕は結構ドキドキした。

「むううーなんだあ、貧乏カルピスじゃなかあ」カルピスウォーターは、思つていたよりも薄味で、どちらかというとS君の家の金持ちカルピスより、僕がビビりながら作つて飲んでいた貧乏カルピスに似た味だった。

「なんだ、S君の家が間違つてたんだあ」

僕は、ちよつとうれしくなった。自分の飲んでいたカルピスは、あながち間違つていなかったのだということがうれしかった。

「家が貧乏だったお陰で、正しい濃さでカルピスを飲んでたんだなあ」とよくわからない感慨にふけていた。

金持ちカルピスを飲んで二十年近い年月が過ぎていた。時間はかかったが、カルピスウォーターの出現によつて、「正しいカルピスの濃さ」という疑問が晴れ、すつきりした。

そういえば最近、お伺いした家でカルピスが出されても、金持ちカルピスになつていることがなくなつたように思う。基準がはつきりするつていうことは、そういうことなのだろうか。

この春、生活支援サービスを始めようとした決心した僕は、昨年の春に長年勤めた施設を退職し、一年間、実際に訪れたり、文章で学んだりして、いろんな形の生活支援サービスを見てきた。その中で、カルピスに抱いたような疑問を、今、生活支援サービスに持つている。

この一年は、どのくらいのサービスを、どんな仕組みで、どのくらいの料金で、どんな職員体制でやる生活支援サービスが理想的なのだろうか？という問いの答えを探し続けた一年だったが、実際にサービスをやっている方々が僕に教えてくれた答えは、「それがわかつていたら苦労しないよ」ということだった。

通所施設で職員が残業してその通所者を預かる。親はいつも見てくれている職員

に預けるから安心とか言つてるけど、だったら、二十四時間三百六十五日同じ人がケアしてくれる入所施設を何で嫌がつてるんだらうと思つた。

利用料一時間二百円もらつて、貧乏だけど頑張つてますとさわやかに語る事業所の職員さん。あなたのケアはそんな安物のケアじゃないでしょと思つた。

入所施設がショートステイをレスパイトと言つていたりする。

行政から補助金もらつたばかりに柔軟なサービスが展開できなくなった事業所、少ない職員・補助金なしでも輝いている事業所、生活支援サービスの明日はどつちにあるんだらう。

生活支援サービスの場合、カルピスと違って、国がほどよい感じの生活支援サービスを提起してくれるなんてことは当分ないだらうから、今は、いろんな所で、いろんな形のサービスが試される時期なのだらう。

どんなサービスが基準となるのか。きつと、その答えはカルピスウォーターと違って画一的なものではなく、そのサービスのある街の文化や地域性、また、サービスを利用する個々の人で違つて来るんだらう。生活つてそういうものだから。

ふわりは、どんな味を出していこうか。この街に住む人がおいしいと感じる味を早く見つけたい。できれば安く、一人ひとりオリジナルブレンドで届けたい。僕は薄いカルピスが好きだけど、濃いのが好きな人がいてもいいしね。

(1999/04 ふわふわVol.1)